

Concept of Transcendental Reflection in the
Critique of Pure Reason by Immanuel Kant

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-08-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊野, 連 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1091

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



カント『純粋理性批判』における超越論的反省概念

Concept of Transcendental Reflection in the *Critique of Pure Reason* by Immanuel Kant

伊野 連

INO, Ren

カント『純粋理性批判』超越論的分析論の末尾に置かれた付録「反省概念の多義性」は、その意義について肯定的に捉える者とそうでない者とに二分されてきた。

本稿はこれを肯定的に捉え、アリストテレス『オルガノン』とライブニッツ哲学に対する、カントの自己表明とみなし、その意義について検証している。その際、カントが伝統的論理学に対して掲げた無限判断の役割についても注目した。

はじめに

カント批判哲学に対する一八世紀当時の新アリストテレス主義の影響力の大きさについて考慮すれば、カントとアリストテレスとの接点について採り上げ、しかし実はそれらが、本質的にはかえってこの二人の偉大な哲学者のあいだに横たわる大きな隔たりを示している、ということを確認することは、「哲学のオルガノン」について考察する¹⁾うえで資するところはけっして小さくないだろうと思われる。

周知のように、アリストテレスの「オルガノン」は、「カテゴリー論」「命題論〔解釈論〕」「分析論」「トピカ」から成る。最後の「トピカ」とはトポス論のことであり、トポスとはギリシャ語で「場所」を意味するが、むしろ「観点」「(論の) 拠点」のことであり、したがってトピカは「観点論」「拠点論」「弁証論」あ

るいは「論拠集」等々と理解することができる。アリストテレス『トピカ』は、その本体と、それから分離独立された『詭弁論駁論』(詭弁的駁論)とから成る。

さてカントは、アリストテレスのいわゆる「論理的な」『トピカ』と、自身の「超越論的トピカ」とを区別する章を「付録」として、『純粋理性批判』の「超越論的分析論」末尾に添えている。それが「反省概念の多義性について」である。

これはきわめてさりげなく置かれた一節であり、そのためもあってか、従来はその意味は不当に軽視されてきた、という批判もある²⁾。

しかし本稿では、その有する意味はけっして小さくないと考える。理由は、この「付録」によってカントが、『純粋理性批判』が批判的に継承したアリストテレス『オルガノン』に対して独自の見解を示しているだけでなく、カントにとってもっと重要な課題であった、

キーワード：批判哲学、純粋理性批判、超越論的反省概念、無限判断

Key words : critical philosophy, *Critique of Pure Reason*, Concept of transcendental reflection, infinite judgment

母国の偉大な先達ライプニッツをも批判的に捉えるという意図を持っていたと考えられるからである。

本稿はカントから捉えられたアリストテレスのみならず、この両者の間に聳え立つもう一人の大哲学者ライプニッツをも視野に収め、三者の違いをカントの超越論的哲学を基準に示すことをその目的としている。

一 論理学的反省と超越論的反省

この付録、すなわち「反省概念の多義性について」(A260-292/B316-349)において、カントは次のように問題を提起する。

「我々が、或る概念に対して、感性もしくは純粹悟性のどちらかにおいて与える場所を、超越論的場所と名づけることを許してもらいたい。そうすれば、あらゆる概念に対して、それぞれの用い方の相違に応じて与えられる超越論的場所を判定すること、また、あらゆる概念に対して、このような超越論的場所を、規則に従って指示することは、超越論的トピカということになろう」(A268/B324)。

或る概念に、感性もしくは純粹悟性において与える位置を、超越論的「場所」と呼ぶ。同様に、より低次の概念が論理的段階においてその下に属するより高次の概念を、その論理的場所と呼ぶことができる。これらの場所の判定はトポスの学、すなわち「トピカ」である。

そしてトピカには超越論的なものと論理的なものがある。もしここで、超越論的反省が無かったならば、反省概念を対象へ不確実に用いることとなり、したがって超越論的「多義性」〔両義性・二義性、曖昧さ〕(Amphibolie)、

すなわち純粹悟性による、対象と現象との混同が起きてしまう。こうしてカントは、古代にアリストテレスによってなされた、トポスをめぐる議論すなわち『トピカ』に対して、自身の固有の意味での「超越論的トピカ」を提起するのである。

このように、超越論的トピカの役割とは、所与の概念（もしくは表象）に超越論的場所を指示することであり、そして超越論的場所とは、感性と悟性のことを指している。その場合、超越論的場所の指示が「規則にしたがって」おこなわれるというのは、前後の文脈から、反省概念を拠り所〔拠点〕として、という意味であると考えられる。

そうだとすると、超越論的トピカというのは、所与の概念が、感性に属するのか、それとも悟性に属するのか、ということ識別する超越論的反省の働きそのものであるということになるだろう。すなわち、超越論的反省が、反省概念にのっとって、所与の概念が感性と悟性のどちらに属するかを決めること、それが超越論的トピカである、というわけである (Cf. 上山1972 : 303 ; 牧野1989 : 89)。このように解釈することがもしも許されるとするならば、超越論的反省と反省概念をテーマとする分析論のこの付録「反省概念の多義性について」全体が、超越論的トピカである、ということができるだろう。

二 体系的トピカとしてのカテゴリー論

ところで、この付録に先立って、既にカテゴリー論が「体系的トピカ」(systematische Topik)と呼ばれているという事実がある。カントは、分析論のなかの「すべての純粹悟性概念を残らず発見する手引き」という章で、四綱目のカテゴリー体系を提示した直後に、

「ここに示されたような体系的トピカ〔位置づけ〕は、それぞれの概念が本来属すべき場所をかりそめにも誤らせることがないばかりか、まだ空いている場所を容易に気づかせてくれるのである」(A83/B109)と述べている³⁾。

もっとも、カント自身は超越論的トピカと、こうした体系的トピカの関係について何ら言及してない。だが、両者が「トピカ」という共通の名を与えられているのは、どちらも、所与の概念に対して固有の場所を指示する働きがあるからであり、反省概念を規則とする前者が、所与の概念に対して、感性和悟性のどちらに属するかを指示するのに対して、カテゴリーを規則とする後者すなわち体系的トピカは、所与の概念に対して、いかなる悟性機能に属するかを指示するにすぎない。このように、超越論的トピカが感性和悟性の両者に関わるのに対して、体系的トピカが悟性とししか関わらない点が、両トピカの最も著しい相違点である。

また、第二版演繹論によれば、カテゴリーとは「感性から独立して、もっぱら悟性だけから生じる」(B144)のものであり、時間空間が感性の形式として、直観を成立させるためのア・プリオリな主体的条件をなすのに対して、カテゴリーは悟性の形式として、概念を成立させるためのやはりア・プリオリな主体的条件をなす。感性形式としての時間空間が、純粋直観と考えられたのに対して、悟性形式としてのカテゴリーは、純粋悟性概念と考えられた。

そしてカントは、悟性は判断する機能であるみなし、「悟性のあらゆる働きを判断に還元することができる」、すなわち「悟性の機能」は「判断における統一の機能を完全に示すことができれば、すべてこれを見出すことがで

きる」(A69/B94)という独自の観点から、実際にそれを成就させてみせた。それが、ほかでもない「カテゴリー〔純粋悟性概念〕の演繹」である。

その際、さしあたってカントは主に、伝統的論理学における判断形式の分類を手掛かりとして、判断機能の体系を「判断表」(A70/B95)の形で捉え、さらにこの表を手引きとして、悟性機能の体系としての「カテゴリー表」(A80/B106)を導出した。今「主に」と述べたのは、もちろんカントは伝統的な論理学をそのまま継承したわけではけっしてないからである。特に重要なのは、「無限判断」説の導入であって、これこそがカント以前のあらゆる論理的判断と、カント固有の超越論的判断とを峻別するものである。やや補足的なかたちで、本稿における考察に際して必要なかぎりでの、無限判断説に基づく見解を以下に示す⁴⁾。

三 無限判断の意義

カントは判断表の「質」において、従来の伝統的な論理学に対して、自身の超越論的論理学の独自性を示すかたちで、無限判断を導入した。すなわち、

判断の質

肯定判断 (AはBである)

否定判断 (AはBでない)

無限判断 (Aは非Bである)

この無限判断が、従来の伝統的論理学においては(いわゆる「論理的な」判断においては)、肯定判断と区別されていないことは、カント自身も表明している。すなわち、「Aは」「B」「である」(肯定判断)と、「Aは」「非B」

「である」（無限判断）とでは、前者の「B」と後者の「非B」とを、意味を度外視して置換できる、と考えるのである。それ故これは、カントによって「形式」論理学と名づけられたのである。

たしかに形式的には「B」と「非B」とは同質であるが、Bに「非」が施されることによって、それは「無規定・不確定 unbestimmt」、さらには「無限的 infinitiv」の意味を有するようになる。無限否定は単なる論理的否定・完全な否定ではなく、むしろその「論理的否定によっては顧慮されないままの實在的対立項を表す」（石川1996：65）のである。

四 無限判断に基づくアンチノミー解釈

したがって、カントが『純粹理性批判』で初めて標榜する超越論的論理学においては、肯定判断と無限判断の区別、つまり無限判断の意義は決定的である。

例えば無限判断を導入することにより、アンチノミーは、措定とその廃棄との間に成立する単なる対立ではなく、或る措定と別の措定との間に成立する、一種の實在的な対立を形成することが明らかとなる。なぜならこうした實在的な関係は、「何か或るもの」と「無」・「零」との間のような形式論理的な関係ではないからである。

すなわち、アンチノミーは単なる矛盾対立ではなく、或る規定をともなった「何か Etwas」と、別の規定をともなった「何か」との間に成立する対立、いわば「総合的対立」⁵⁾であることが示されるのである。ここでは、対立し合う二つの命題は相互にアンチテーゼの位置に立ち得るゆえに、単に一方的ではなく、テーゼとアンチテーゼとは逆の関係でもあり得ることになる。

こうした實在的な対立をどのように考えるかということは、すなわち、それについてどのように「反省する reflektieren」かという風に言い換えられる。既に述べてきたように、カントは反省概念を「論理的反省」と「超越論的反省」とに峻別していた。さもなければ、反省概念のこのような多義性（二義性）は、誤謬推理の原因となるからである。

いわゆる媒概念の二義性によって生じる誤謬推理は、心理学的誤謬推理だけでなく、アンチノミー論においても問題となる。アンチノミーとは、誤謬推理の最も特殊で巧妙なケースであると考えられ、先述の媒概念の二義性による誤謬推理は、本稿が主題とする反省概念の多義性に起因するのである。

以上から、反省概念の二義性は「質」の契機に関して、次のような二様に表示することができる（Cf. Behn 1908：17；石川1996：98-103）。

①論理的反省

一致 肯定判断

反対 否定判断

②超越論的反省

実在性 { 肯定判断

無限判断

否定性 否定判断

五 論理学的反省の限界

カントにとって、判断とは「表象のあいだを統一する機能」（A69/B94）であり、全称判断、特称判断、肯定判断、否定判断の判断形式は、諸表象の統一のさまざまなしかたを表すものである。このように、判断形式が諸表象のあいだの関係を規定するものとみなさ

れるかぎり、同様に、諸表象（もしくは諸概念）のあいだの関係を規定するものとされる反省概念と、どのような関わりをもち、どのような点で区別されるか、という点は注目すべきである。カント自身もこの点に無関心でありえなかったのは当然で、件の反省概念論のなかで、両者の関係について次のように指摘している。

「すべて客観的判断を下すに先立って我々は概念を比較し、その結果、全称判断を下すためには一義性（一つの概念のもとへまとめられた多数の表象の）へ、特称判断のためには差異性へ、肯定判断のためには一致性へ、否定判断のためには対立性へ、等へ到達することができる」（A262/B317-318）。

この場合、従来の形式論理学の観点から、判断形式を、たんに諸表象のあいだの関係を規定する主体的な条件として取り扱うならば、所与の諸表象もしくは諸概念を比較してみても、相互の関係が、「一義性」「差異性」「一致性」「対立性」の四とおりの関係のうちのどれを示すかによって、「全称」「特称」「肯定」「否定」の四つの判断形式のうちのどれかに従う、といえは足りるであろう。

しかし、もしカントの超越論的論理学の観点に立って、判断形式を、たんなる思惟の主体的な条件ではなく、対象一般の概念として客観的妥当性をもつべきカテゴリーの手引きとみなすならば、それでは済まない。すなわち、所与の諸表象もしくは諸概念の従うべき論理的形式のみが問題ならば、それらの表象もしくは概念を比較しさえすればよいのだが、所与の諸表象もしくは諸概念と対象との関係が問題となる場合には、それらの表象もしく

は概念が、悟性に属するのか、それとも感性に属するのか、ということを判別する「超越論的反省」が必要となる。

六 超越論的反省という手法

こうした考え方に基づくカントの見解は、以下のとおりである。

物について、「一義性」すなわち「同一」なのか、それとも「差異性」すなわち「相違」しているのか、あるいは「一致」しているのか、または「対立性」すなわち「反対」しているのか等々は、たんに所与の諸概念そのものを比較するだけでは、ただちに決定することはできない。

「論理的反省はたんなる比較にすぎないということができよう。なぜならその場合、与えられた表象の所属する認識力はまったく捨象され、したがって、それら所与の表象は心に座をもつかぎりで、同種的なものとして扱われるべきだからである。これに反して超越論的反省（これは対象そのものに関わる）は、表象相互の客観的比較を可能にする根拠を含んでおり、したがって論理的反省とは大いに異なっている。なぜなら、表象の所属している認識力が同一ではないからである」（A262-263/B318-319）。

たんなる論理的反省ではなく超越論的反省を用い、所与の表象が属している認識のしかたを判別することによって初めて、物についての一義性、差異性、一致性、対立性等は決定することができるのである。

こうして展開される「超越論的トピカ」は、むしろカントにとって、アリストテレス『トピカ』に対するものという意味よりは、当時

の哲学史において直接カントに先行する偉大な存在であったライプニッツに対する本質的な批判であったとされている。ライプニッツこそが、カントの最大の仮想敵だったのである。

七 ハイデガーのカント解釈

「カントは、存在者の人間的経験とその経験の対象とをあらわにする彼の解釈の終結箇所、すなわち彼の批判的存在論の終結箇所、**「反省概念の多義性について」**という表題で或る一つの付録を加えた。その付録はライプニッツとのカントの対決を示している。カント自身の思惟という点に着目して考察するならば、この「付録」は、遂行された思惟の歩みと場合に踏査された次元とを振り返ってみるという回顧的省察を、内容として含んでいる。回顧的省察はそれ自身或る新たな歩みであり、カントが存在解釈で遂行した最も極限的な歩みである。この解釈が悟性使用を経験に制限することにあるかぎり、その解釈内では悟性の限界づけが問題とされている。そのためカントはこの「付録」に加えられた「註解」(A280 / B336)のうちで次のように言う。諸反省概念の所在究明は「悟性の諸限界を確かなしかたで限定し確保するという大きな公益をもった」ことである、と」(Heidegger 1976 : 472)。

このように述べているのは『道標』(一九六七年)におけるカント論「存在についてのカントのテーゼ」でのハイデガーである。それでは啓蒙時代の幕開けと悼尾とを飾るこの偉大な両哲学者の哲学史上における思想的対決を、二〇世紀のもう一人の偉大な哲学者であるハイデガーの概括を手掛かりに理

解しよう。

カントによってアリストテレスのいわば論理的なトピカに抗して掲げられた超越論的トピカは、批判哲学からのライプニッツ哲学批判という野心的な理念に呼応して、反省概念の多義性を考究する超越論的反省論という、ハイデガーの言葉を借りれば、「それ自身或る新たな歩みであり、カントが存在解釈で遂行した最も極限的な歩み」として、きわめて重大な意義をもっている。

ここでの、カントからみたアリストテレスとライプニッツという二人の偉大な哲学者像は、いったいいかなるものなのだろうか。当然これは、その直接的な内容から、アリストテレス『トピカ』を批判的に継承することで、当面の敵であるライプニッツを厳しく批判する、と捉えるのが普通であろうし、また、ライプニッツ批判を通じてのアリストテレス論理学の全面的見直しの一環として、カントの超越論的トピカを捉えようとする立場もあるだろう。

そこでハイデガーは言う。「純粹理性批判の帰結として変貌された存在論」、「存在者の存在を経験対象の対象性として追考する」こと、それこそが、「超越論的 - 哲学」である。そして、ハイデガーが標榜する超越論的 - 哲学としての存在論は論理学に基づくが、それはもはや従来の形式論理学ではなく、「超越論的統覚の根源的な総合的統一から限定された論理学」(Heidegger 1976:462)なのである。この「超越論的統覚の根源的な総合的統一」が、ハイデガーの著書『カントと形而上学の問題』(一九二九年 : Heidegger 1991)、およびそれに先立つ講義「カント『純粹理性批判』の現象学的解釈」(一九二七／二八年冬学期 : Heidegger 1977)においては、ここで採り上

げている「トピカ」よりもいっそう重大な問題とされていることは、もはや自明であろう。

八 フェノメナとヌーメナ

さらにハイデガーは続ける。カントによれば、『純粹理性批判』は、「すべての対象一般をフェノメナ(感性体[現象体])とヌーメナ(叡智体[可想体])とに」区別する(A235/B294)。後者はさらに、消極的意味でのヌーメナと、積極的意味でのヌーメナとに区分される。感性に関係づけられぬ純粹悟性一般のうちで、表象されはするものの、認識されず、さらにまた、認識可能でないもの、それは「X」とみなされ、現象する対象の根底に存するものとして、思惟されるのみである。それは積極的意味でのヌーメナ(複数形「ヌーメノン」)、すなわち「非感性的対象自体」を意味し、例えば神がそうであるように、それは「我々の理論的認識にはどこまでも閉じられている」。なぜなら、それに対してこの対象が「直接的にそれ自体で現在しうような非感性的直観」、そういう直観は「我々の手中に存在しないからである」(Heidegger 1976 : 463)。

さらにハイデガーは、「定立としての存在がそれに所属している場所」、その場所の「網目の内に諸条線をカントはこの「付録」の内ですべてどの程度まで引いているか」、そのことを問題とする。なぜなら「定立としての存在解釈の内には次のことが含まれている」からである。すなわち「対象の定立と非定立とが、認識力への様々な関わり合いから解明されている、ということ」であり、「その解明が認識力への反転関係の内です、すなわち屈折し返すということの内です、つまり反省の内ですなされているということ」である(Heidegger

1976 : 472)。

そしてこの考察はカントにおいては、「心の状態」(A260/B316)すなわち「人間的主観」へ向けられる。考察は「もはや真直ぐに経験の客観へ向かっていくのではなく」、その考察は「それ自身を、経験する主観へ向かって、屈折し返す」のであり、つまりこれが「反省」なのである。

したがってハイデガーによれば、反省が表象作用の次のような諸状態と諸関係とに、すなわちそれによって総じて存在者の存在の境界づけが可能になる諸状態と関係とに、注目するならば、その場合、「存在の所在」である「場所」の内に含まれているその場所の「網目へ向けられた反省」は、「超越論的反省」である。ハイデガーによって、カントの見解(A261/B317)はこのように説明されるのである。

九 ハイデガー説のまとめ

「それによって私が一般に諸表象の比較と、この比較がそれで行なわれる認識力とを対照する働き、しかもそれによって私が、それらの表象が純粹悟性と感性的直観とのいずれに属するものとして相互に比較されるかを、区別する働き、その働きを私は超越論的熟慮[反省]と名づける」(Heidegger 1976 : 473)。

定立としての可能的存在の解明に際しては、経験の形式的諸制約への関わり合いが働きの内に入って来ており、したがって、形式という概念が働いていた。一方、現実的存在の解明に際しては、「経験の質料的(materiellen)諸制約」が言葉に言い表されて来ており、したがってまた、質料という概念が言い表されていた。ゆえに、定立としての存在の諸様相

性の解明は、質料と形式との区別への注意のうちで遂行されている。その区別は、定立としての存在の場所にとって、その場所の網目のうちへ所属して入っているのである。

ハイデガーによってまとめられたカントのライプニッツ批判は概ね以上のような内容である。これはアリストテレス「オルガノン」の関係史という直接のテーマからは当然逸脱するものであったが、冒頭でも述べたように、カントが直接影響を被った新アリストテレス主義ないし「新スコラ哲学」との関係を考えるならば、いわゆるプロテスタント圏におけるアリストテレス受容史の問題として、ライプニッツという巨人は避けて通ることはできない。カントがライプニッツに抱いていた対決の必然性を、ハイデガーの慧眼は見抜いていたわけである。

むすび

本稿の狙いは、カント『純粹理性批判』におけるアリストテレス「オルガノン」の痕跡を見出すことで、いわゆる形式論理学と超越論的論理学との関わり、さらには批判哲学全般との関わりを再検討することであった。

したがってその論法は、まずアリストテレスの「オルガノン」の直接的な影響と、カントによる独創性を見極めるといったものとなった。後者はさらにシェリングやヤスパースといった他の関心へと結びつくものである。

この『トピカ』をめぐるカントからアリストテレス、そしてさらにライプニッツへの問題提起については、他の機会にてより詳細に検証されるべきであろう。

註

カント『純粹理性批判』については慣例に従い、初版をA、第二版をBと表記する。その他の著作はアカデミー版全集によりAAで表記した。

- 1) 「哲学のオルガノン」というより大きな研究テーマに関しては、Cf. 伊野2010；2012。
- 2) ファイヒンガー (Vaihinger 1922) やそれを承けたツィルゼル (Ziessel 1913)・スミス (Smith 1923) らは、この「付録」を文字どおりの付録程度のもとのみなし、その執筆年代も一部は一七七〇年代初頭、ツィルゼルは一七七一年 (Ziessel 1913：433) と断定し、スミスもいわゆる「七〇年論文」(「就職論文」とも呼ばれる『感性界と叡智界の形式と原理 *De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principii*』) との共通性を指摘している (Smith 1923：419)。それに対して、まずハイデガーによって大きく異議が唱えられた。彼はこの付録をきわめて重視し、「おそらくはずっと後に、『純粹理性批判』の完結の後に、初めて挿入されたものであろう」とまで述べている (Heidegger 1976：472)。もしハイデガーの推測が正しいとするならば、ヘーゲルが『精神現象学』の「序文」を全篇を書き上げて後に記し、その意義を自ら強調したように、この付録は『純粹理性批判』全体を締めるべき論述とまで考えることができるであろう。なお、この付録の意義を高く評価している主な先行研究には、前掲ハイデガーのほか、コッパー (Kopper 1971：10)、上山 1972：294-307、牧野1989：73-95；1996：12-30；石川1996：98-103などがあり、本稿もこれらの労作、特に牧野1989に多くを負っている。
- 3) 石川説も、「判断における思考のすべての契機の超越論的表」であるカテゴリー表 (B98) を、超越論的反省の表と「完全に一致する」と見ている (石川1996：101)。
- 4) カントにおける「第三の思考」すなわち無限判断の意義をこの上なく高く評価し、自身のカント理解の基盤となしているのが、石川 (文康) 1996である。また、同姓の石川求も (参照したかぎりでは) 1988年以来、数々の注目すべき論考を著している。

5) カントはかつて著した「形而上学の進歩（に関する懸賞論文）Welches sind die wirklichen Fortschritte, die die Metaphysik seit Leibnizens und Wolffs Zeiten in Deutschland gemacht hat?」（一七六四年公刊時の正式名称は「自然神学と道徳の原則の判明性に関する研究 Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral」）で既にこの「総合的対立」という言葉を用いている（AA vol. XX : 291 ; 石川1996 : 98-99）。とすると、こうした見解は、この懸賞論文がベルリン・アカデミー哲学部によって募集された一七六一年頃にまではるかにさかのぼるとも考えられる。

文献

- アリストテレス1944：『辨証論（トピカ）』山内得立／多賀瑞心訳、河出書房（山内「訳註」）
- Behn, Sigfried 1908 : *Die Systembildung des dogmatischen Rationalismus im Lichte von Kants Amphibolien der Reflexionsbegriffe dargestellt*, Inaugural-Dissertation.
- Heidegger, Martin 1991 : *Kant und das Problem der Metaphysik*, Bonn 1929, in : Gesamtausgabe, vol. 4 (ハイデガー『カントと形而上学の問題』)
- Heidegger, M. 1976 : These über das Sein, in : GA, vol. 9 (Wegmarken) (ハイデガー「存在についてのカントのテーゼ」、ハイデガー『道標』辻村公一／ハルトムート・ブフナー訳、創文社に所収)
- Heidegger, M. 1977 : *Phänomenologische Interpretation von Kants Kritik der reinen Vernunft*, GA, vol.25 (1927/1928 WS), Frankfurt am Main (ハイデガー『カント『純粹理性批判』の現象学的解釈』石井誠士／仲原孝／ゼヴェリン・ミュラー訳)
- 今道友信（編）1982 : 『藝術と想像力』東京大学出版会
- 伊野連2010 : 『「哲学のオルガノン」についての考察——アリストテレス、カント、シェリング、ヤスパースにおける藝術哲学と形而上学——』博士（文学）学位論文、東洋大学、乙（文）第七十九号
- 伊野連2012 : 『ドイツ近代哲学における藝術の形而上学——カント、シェリング、ヤスパースと「哲学のオルガノン」の問題——』リベルタス出版
- 石川文康1996 : 『カント 第三の思考』名古屋大学出版会
- 石川求1988 : 『「無限判断」と批判哲学』、東北大学哲学研究会編『思索』, vol.21, pp.45-66
- Kähler, Klaus Erich 1981 : Systematische Voraussetzungen der Leibniz-Kritik Kants im Amphibolie-Kapitel, in : *Akten des 5. Internationalen Kant-Kongresses*, Teil I.
- Kopper, Joachim/Malter, Rudolf (ed.) 1975 : *Materialien zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Frankfurt am Main
- Kopper, J. 1976 : *Reflexion und Determination*, Berlin
- Lamacchia, Adda 1974 : Über die transzendente und logische Topik in der Kritik der reinen Vernunft, in : *Akten des 4. Internationalen Kant-Kongresses*, Teil I, pp.113-139
- Liedtke, Max 1966 : Der Begriff der Reflexion bei Kant, in : *Archiv für Geschichte der Philosophie*, vol. 48, pp.207-216
- 牧野英二1989 : 『カント純粹理性批判の研究』法政大学出版局
- 牧野英二1996 : 『遠近法主義の哲学 カントの共通感覚論と理性批判の間』弘文堂
- Smith, Norman-Kemp 1923 : *A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason*, 2. edn. (1. edn., 1918)
- 上山春平1972 : 『歴史と価値』岩波書店
- Vaihinger, Hans 1922 : *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, 2 vols., 2. edn. (1. edn., 1881-1892)
- 山内得立1960 : 『ギリシアの哲学4』弘文堂
- Zilsel, Edgar 1913 : Bemerkungen zur Abfassungszeit und zur Methode der Amphibolie der Reflexionsbegriffe, in : *Archiv für Geschichte der Philosophie*, vol. 26 (4), pp. 431-448